

平成22年4月28日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2011

課題番号：19530756

研究課題名（和文）多民族社会における教育の国際化の進展に関する国際比較研究

研究課題名（英文）International comparative study on the progress of the internationalization of education in multi-ethnic society

研究代表者

竹熊尚夫（TAKEKUMA HISAO）

九州大学 大学院人間環境学研究院・准教授

研究者番号：10264003

研究代表者の専門分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：比較教育学

1. 研究計画の概要

本研究は多民族社会において、各民族がそれぞれ特有の状況下で文化的・社会的特性を發揮し、教育面において、いかに国際的な特色を有しているか、また、民族独自の国際的な教育連携を築くことで、国・地域が総合的に、どのように多様な教育の国際化を遂げているかについて、現地調査を基に明らかにすることを目的としている。

具体的な調査対象国（地域）としては、マレーシア、シンガポール、フィリピン、フィジー、オーストラリアを計画している。研究の対象は、先住民族を始めとする多様な民族であり、民族教育であるが、特に移民としてのルーツを持つ少数民族である中華系そしてインド系に焦点を当て、民族の国際的連携や教育ルートなどの動態を明らかにする。これらの調査研究を踏まえて、比較対象として日本の状況も踏まえながら、それぞれの国における民族に関わる教育の国際化状況を総合的に明らかにする。

2. 研究の進捗状況

(1)19年度は調査準備期間として、必要な先行研究の収集、対象国・地域の教育情報の収集と、研究の役割分担について協議を行った。
(2)20年度は①フィリピン現地調査を実施した。フィリピンでは多民族社会における中華学校を中心に、中華系の生徒・教師を主体とした中華系の名前を冠する学校、カトリック系のエリート学校だが中華系の生徒が多い学校、など複数の中等学校に訪問し、校長、教

頭、語学教師など関係者との面接、資料収集等を行った。②高等教育における民族と国際化の関わりについて、アテネオ・デ・マニラ大学、フィリピン国立大学、国立フィリピン師範大学の国際交流部及び関係部署を訪問し、インタビューと情報収集を行った。③フィリピンの収集データを整理し、一部を論文にまとめ発表すると共に、昨年度から継続している民族学校の多民族社会における研究の位置づけについて論文をまとめこれも公表した。
(3)21年度は①補足調査のために、長濱がフィリピン調査を平成22年3月6日より16日まで実施した。これはマニラで実施したが、教師教育研修の実態調査とムスリム生徒に対する価値教育の実践調査を行った。②8月13日～18日にかけてフィジー調査を実施した。JICAの協力も得て、フィジー系学校調査を行い、その他、インド系学校調査、南太平洋大学のフィジー系、インド系教育研究者との協議、中華系の政府補助学校の訪問調査などを実施した。③これらの調査成果は、一部で学会報告しているが、今後研究論文等でも発表予定である。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している
(理由)

(1)これまでの成果としては、フィリピン調査では「チノイ」と呼ばれる中華系フィリピン人は一般の公立学校に通い、フィリピン社会では古くから順応し、フィリピンナショナリズムのもと統合され、潜在化している一方で、

民族系の学校数は多くはないものの、中国語教授や養成される学力の高さから、中等教育、高等教育の教育機関を運営し、教科書、教師採用などにおいて台湾や大陸との関係も保持していることが明らかとなった。コミュニティとの関係においては、中華街のような境界は日本のように明確ではなく、統合されながらも中華文化としてのルーツを維持し、また、フィリピン特有の地域差や多宗教・多民族性、チノイでありながら独立の英雄であるホセ・リサールの存在などから、タイやマレーシアのような閉鎖的かつ先鋭的でないナショナリズムとしてのフィリピン独特のあり方が見られた。民族学校と民族コミュニティ、より大きなフィリピン社会との関わりにおいて中華学校は中国語圏への学習の窓口となりマニラの高等教育と並んで地方や異民族から海外への結節点となっていることなどが判明した。

(2) フィジーは極めて、マレーシアの民族対立状況に近似していることが判明した。これは移民であるインド系と先住民であるフィジー人の教育政策として人材養成の競争や英語の共通語と共にフィジー語の必須化という政治的、政策的動向からも明らかとなっている。ここに多民族社会での教育面における政治的コンフリクトと統合の問題の一つの事例が抽出できたと考えられる。

(3) フィジーでは歴史的に古い中華学校もあるが、近年農業移民としている中国大陸からの移民の増大による中華学校の拡大と統制、ムスリム系インド人移民の問題など、世界の各地で先鋭化している教育場面での民族問題を同時並行的に解決せざるを得ない状況があり、グローバリゼーションや教育の国際的ネットワーク化(中華学校での大陸からの教師の派遣など)として更なる研究の必要性が明らかとなった。

4. 今後の研究の推進方策

本年度は、最終年度にあたるが、マレーシア、オーストラリアの現地調査を行う予定である。シンガポールについては、民族による教育ルートや教員養成、海外連携の特徴を先行研究文献から集め分析することを中心とする。オーストラリアは今年度、長濱氏が単独で行うこととした。時期は双方とも8月頃2週間程度を予定している。

マレーシアはペナン、KL、クチン、コタキナバルから選定する。ペナンは三民族融合が進んだ地域としての民族教育を対象とし、KLと郊外は中華系の学校とインド系の学校、クチン、コタキナバルは中華系学校が国際学校として近隣諸国からの学生を集めている状況について調査する。訪問調査地は事前にイン

ターネットや先行研究調査で訪問都市と学校を選択する予定である。現時点ではマレーシア島嶼部ではコタキナバルとクチン、そして半島部ではKLもしくはペナンの何れかを選定する予定である。特にコタキナバルはフィリピン調査と同様に、華人の現地への融合が進んでいるため、大変貴重なデータが得られると考えている。このため、竹熊真波氏も同行して、華語教育の側面からも研究をすすめる予定である。一方、フィジーで明らかになったインド系とフィジー系の対立や国際教育状況はマレーシアにおいても比較検討することが有益であることから、こうした側面からのインド系とマレー系の教育関係をKLもしくはペナンの何れかで調査することを計画している。現地調査研究は8月までで完了させ、研究の成果を、学会発表や紀要、インターネット上で紹介する。

調査終了後、研究会で最終的な研究の成果をまとめると共に、1月頃までにはマレーシア、シンガポール版の報告をまとめ、3月には最終成果報告書を刊行する。これらの成果を今年度と来年度において、日本比較教育学会や九州教育学会等で発表を予定している。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

竹熊真波 「フィリピンにおける中華学校について」福岡国際大学紀要 21号 2009 pp.1-10

竹熊尚夫 「多民族社会の教育研究における民族教育制度の視座—比較教育学的考察—」九州大学大学院 教育学研究紀要 11(通巻54) 2009 pp.45-60

〔学会発表〕(計2件)

竹熊尚夫・竹熊真波・長濱博文

「フィリピンにおける民族共生と教育—中華学校のカリキュラムを中心に—」第45回日本比較教育学会2009年6月28日 東京学芸大学

長濱博文 「価値の概念形成を促すカリキュラム・ディベロップメント—フィリピンにおける価値の明確化理論による平和構築—」第20回日本カリキュラム学会 2009年7月14日 神田外語大学

〔図書〕(計2件)

竹熊尚夫 「多民族社会における教育の国際化への展望」『21世紀の教育改革と教育交流』東信堂 2010 pp.234-248

長濱博文 「フィリピンにおける価値の明確化理論の可能性」『21世紀の教育改革と教育交流』東信堂 2010 pp.150-165